

研究分野のキーワード：哲学，形而上学，西洋近世哲学史，近世合理主義哲学

研究紹介

高校生の皆さんこんにちは。愛知教育大学で「哲学」や「倫理学」の授業を担当している吉田健太郎です。皆さんは「哲学」という言葉を聞いて、どのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。理屈っぽい、屁理屈を並べている、という感じでしょうか。堅苦しい、というものでしょうか。役に立たないお説教をほざいている、という感じでしょうか。あるいは、否定的なイメージではなく、ものごとを深く突き詰めて考えること、と肯定的なイメージを抱いた人もおられるでしょう。たしかに「哲学」とは何かを定義することは、それを専門に研究している私自身にとっても難問であります。とはいえ、哲学の原語であるピロソピアが「知恵を愛する」という意味であるということが、出発点であり根本だと考えています。では「知恵を愛する」とはいったいどういうことなのでしょう。実はそのことを探求することが、私の研究テーマだといえます。

「知恵を愛する」ことは、「知識を愛すること」平たく言えば「知的好奇心」のことなのでしょう。物知りになることなのでしょう。ギリシア以来の西洋哲学史をみてみますと、どうやら、そうではないようです。西洋哲学の原点ともいえるソクラテスの「無知の知」という言葉を聞いたことがありますか。「知恵を愛する」ことは、この「無知の知」と根本のところにつながっている、と思われ。ところで「無知の知」を、単純に「自分が無知であることの自覚」と解釈しただけでは、哲学者たちの思索の核心に触れていないと思われ。自分はまだ理解が不十分だから、もっと努力して物事の本質を理解するよう努めなければならない、といった教訓として「無知の知」を解釈することは、おそらく誤読でしょう。現在はまだ知らないけれども、学問の進歩によっていずれ知られるようになるだろう、そのためにたゆまぬ知的努力が欠かせない、といった教訓と「無知の知」とは根本的に位相が異なると思われ。すこし話が難しくなりましたね。

細かい議論は飛ばしてあえて単純化して言うのであれば、「無知の知」とは、人間の認識の「限界」を自覚することだと思います。哲学の専門用語に「形而上学」という語がありますが、これは、目に見えないもの、形のないものの考察です。観察が不可能なものを扱う探求です。科学的探求は客観性を求められますが、「客観的」とはどういうことなのでしょう。事物の「本当のありかた」を知ることが客観的認識だとするならば、私たちの認識はそれに到達することができるのでしょうか。認識の限界や制約はないのでしょうか。もちろん、そうした限界は目に見える形で現れません。存在に関しても同じ事がいえます。「宇宙」や「私」の存在について、どれだけのことを知りうるのでしょうか。存在の「根拠」についてどれだけ知りうるのでしょうか。疑問はつきません。「知恵を愛して」とことん考えるしかありません。